

であり、この最終コマでここまで予想がひっくり返されたり、意外の結末になったりする。読者がそれに納得すれば、ひそかに笑みをもらすことになるはずだ。もっとも、それにしても、この画面内の情報量はいささか多すぎるし、それらが複雑に交錯しているように思える。

1.2. お父さんの言動

まず、肝心のお父さんの言動から見てみよう。お父さんは、「やれやれよかった。あとで回収しよう。」と、つぶやいている。何が「よかった」のか。もちろん金槌の頭のゆくえである。お父さんは、次のように考えたのだ。

第三コマ目の「ガチャ」という音から、お父さんは、金槌の頭が自宅の屋根の上に飛んでいったと推断した。もし金属部分が人間にぶつかったり、壊れやすいものを直撃していたりしたら、大変なことになる。大きな事故は避けられたのだ。お父さんの安堵の心情は「やれやれよかった。」というセリフに表れている。当面、緊急事態が避けられたなら、慌てて対処する必要はない。したがって、「あとで（金槌の頭を）回収しよう」と結論したのである。

こう考えると読者は、その前の第二コマ目でびっくりしているお父さんの表情から、金槌の頭が無くなったことへの驚きと同時に、金属のかたまりが事故につながる懸念をも想像すべきなのかもしれない。実際この段階では、凶器がどこへ飛んでいったのかは不明なのである。

さらに言えば、このセリフは四コマ目ではなく三コマ目に書かれていてもよかったかもしれない。それにもかかわらず、四コマ目にこのセリフを記したのは、おそらく塀の外の子どものセリフと並べることで、両者の懸隔を対比的に提示しようとしたからだろう。つまり、この二つのセリフを同じコマの中に併記することで、お父さんと塀の外の子どもの言動がかみ合わず、相互にずれていることを強調しようとしたのである。いうまでもなく、このマンガの「オチ」の面白さは、そこに潜んでいる。

1.3. 塀の外の子どもの登場

お父さんは、金槌の頭が屋根にあると推定した。だが、実際に「ガチャ」という音を立てて屋根に着地したのは、子どもたちの蹴り上げたサンダル的一片だった。そのことは、第四コマ目の絵を見れば

明らかである。第四コマ目にはクローズアップされた片方のサンダルがはっきりと描かれている。

ではなぜサンダルが屋根の上にあったのか。というより、塀の外の子どもたちがどうして、このストーリーの中に闖入してくるのか。

このマンガでは、登場人物は第一コマ目から第三コマ目までは、お父さんだけである（ポチは除く）。このマンガのストーリーは、お父さんを中心に進行してきた。もっともそれは、あくまでも舞台を塀の中の自宅の庭に限定した場合である。塀の外では、別のストーリーが進行していた。すなわち子どもたちが、サンダルを投げ上げて天気占いをして遊んでいたのである。子どもたちは、お父さんが自宅に庭に出てくる以前から、塀の外で遊んでいたのかもしれない。しかしそれはお父さんには知覚されていないし、このマンガの読者にも未知情報である。

最後の第四コマ目に至っても、お父さんには塀の外の子どもたちの姿は見えていない。同様に子どもたちにも、塀の中のお父さんの姿は見えていない。双方の視界は塀によって截然と遮られている。それゆえ、子どもたちには、日曜大工に取りかかったお父さんが金槌の頭を見失ってしまったことなど想像もできない。お父さんもまた、子どもたちがサンダルの片方を投げ上げて屋根に乗せてしまったことなど知るよしもない。その両方の情報を知っているのは、読者だけだ。

1.4. ドローンの視点

そのような特権的な読者の視覚を可能にしたのは、第四コマ目を描写する語り手（観察者）の「視点」である。このマンガは、第三コマ目までは、庭の中のお父さんに寄り添った視点で描かれている。しかし、第四コマ目で、語り手（観察者）の視点はまるでドローンのように地上から空中へと飛翔する。そのことによって、読者は塀の中と塀の外、ならびに屋根の上を見渡すことができるようになり、お父さんの行動と子どもたちの行動との双方を俯瞰する視角を獲得するのである。

塀の中のお父さんのストーリーと塀の外の子どもたちのストーリーとは、本来互いに交流する必然性はない。しかし、お父さんが手にした金槌の頭が軸を外れたその瞬間、子どもたちのサンダルも足から離れて飛んでいった。サンダルの片方は「ガチャ」という音を立てて屋根の上に落ち、同時にお父さん

の頭の中で、金槌の頭が屋根の上に落ちる。この時、二つの偶然は相互に結びつき、新しい必然が誕生したのである。

お父さんは、屋根の下に近い庭先で作業をしていた。したがって、屋根の上の物体を直接見ることはできない。しかし、塀の外の子どもたちは、お父さんの家から離れた場所にいるので、小さいけれども屋根の上のサンダルがよく見える。もちろんそうした状況は、ドローンの視点からは丸見えだ。

近隣の子どものうちの一人は、屋根の上に表を向けて鎮座しているサンダルを見て、「あした晴れだ」などと、のんきなことを言っている。一方、サンダルを失った子どもの片方の足は、裸足になってしまった。この子どもは、指をくわえて遠くの屋根の上を眺めているしかない。この後、サンダルはどうしたらこの子の元に戻ってくるのだろう。「この後」の子どもたちのストーリーは、第四コマ目を超えても続いていく。

1.5. お父さんのストーリーのさらなる展開

ところで、第四コマ目によくよく目を凝らすと、左の上の隅に小さく「あー」という「声」が記されていることに気がつく。これは誰の声で、どこから聞こえてきたのか。結論的に言えば、おそらくこれは、ののちゃんの家族のうちの誰かの声だろう。

そう考えた根拠は、稿者がこのマンガの長年の愛読者であるからでもある。四コママンガは、単独の回だけでストーリーが完結する。しかし長期にわたって連載されているせいで、同じ人物や同じ舞台設定が繰り返し登場し、人物のキャラクターも固定されていく。その結果、「ののちゃんワールド」とでも言うべき空間ができあがる。とりわけ「ののちゃん」一家の五人は、このシリーズの中心的な登場人物で、それぞれが個性を持った人間として描かれている。愛読者は、当然そうしたことを熟知している。

ののちゃんのお父さんも、これまでに様々な場面に登場して、多様な言動を展開してきた。お父さんは、建設会社の中間管理職として真面目に仕事に取り組み、家庭では誠実な父親として造型されている。その一方で、暇さえあれば中古の愛車に家族を乗せたり、また下手な日曜大工と魚釣りに執心する愛すべき欠点(?)もある。その欠点から生まれた数々の失敗行動によって、お父さんが家族から無視されたり、叱られたりする姿は、これまでも度々描

かれてきた。

したがって、このマンガの愛読者なら、お父さんが日曜大工を始めようとした第一コマ目を見ただけで、必ずや失敗に終わるに違いないという予感がするのではないだろうか。今までにも、お父さんが日曜大工で作った数々の制作物は、その多くが欠陥品だった。第 8081 回の第一コマ目に登場するポチの犬小屋もお父さんの作品だが、ポチはこの小屋に不満だし、家族からの評判も芳しくない。今日の日曜日にしても、お父さんの日曜大工姿を目の前にしたポチは、大慌てで尻尾を巻いて小屋の中に避難しようとしているように見える。場合によっては、飛来してきた金属のかたまりの被害者は、このポチだったかもしれないのである。

つまり「ののちゃん」の長期読者の多くは、お父さんが日曜大工で立派な製品を完成させるというような結末を想定していない。その通り、またしてもお父さんの日曜大工作業は「失敗」に終わることになる。もっともこの第四コマ目には、それがどのような「失敗」だったのか明示的に描かれていないが、描かれていなくても「失敗」だったことは、「あー」という家族の声から十分に想像できる。

お父さん自身は、屋根の上にあるはずの金槌の頭を「あとで回収しよう」と考えて、家の中に入ってしまった。しかし案に相違して、その金属のかたまりは、家の中に飛び込んで惨劇を引き起こしていた可能性が高い。障子や襖を突き破ったのか、貴重品にぶつかってそれを破壊したのか、あるいは誰かに当たって昏倒させたのか、具体的な事例は不明であるものの、それを見つけた家族の誰かが驚愕して上げた声が「あー」なのだ。繰り返すことになるが、どのような事態が展開していたのかは、このマンガの第五コマ目が無ければ分からない。しかし、少なくとも「やれやれよかった。」というお父さんのセリフと正反対の出来事が勃発していたことだけは間違いない。

1.6. 第四コマ目の図像表現と文章表現

先ほど、第四コマ目の情報量が「いささか多すぎる」と書いた理由は、以上のようなこと、すなわち、二つのストーリーが交錯していること、メインストーリーにはまだこれから一波乱ありそうなこと、そこには画面に出て来ない家族の関わりが示唆されていること、などが錯綜しているからである。情報過多

の証拠は、一画面に詰め込まれた情報を文字表現によって解読するのに、ここまで二ページ近くの紙数を費やしてしまったことでも明らかだろう。

しかしここであらためて確認しておきたいのは、これだけの情報を一つの画面にてんこ盛りにできたのは、それが図像表現だったからだということである。それも、第四コマ目が、第一コマ目から第三コマ目のように地上視点ではなく、鳥瞰的視点を採用しているということが重要なのだ。語り手(観察者)の立ち位置がドローン的だったからこそ、多くの情報を描き込むことが可能だったのである。

一般に、文章表現は「線条性」という性質を持っていると言われる。文章は、前から順に読まなければ何が書かれているのかは分からないし、時間や論理の順序にしたがって文章を書かなければ、一貫性や内容のまとまりは生まれえない。それに対して、図像表現は、いくつかの内容を同時に単一の絵の中に表現することができる。

そのことを、「ののちゃん第 8081 回」の第四コマ目に即して言うなら、次のようになるだろう。つまり、図像表現を採用すれば、一枚の平面にお父さんのストーリーと子どもたちのストーリーを同時に並立して描くことが可能になる。一方、それを文章表現で記述しようとするれば、二つのストーリーを分離した上で、別々の文字列を使用して書かなければならない、と。

これからの教育には、こうしたメディアの違いが生み出す表現の差異を学習者に実感的に気づかせることが求められている。それを具体化する方策の一つとして、このようなマンガ(図像表現)を作文(文章表現)に変換して、両者を比較してみる学習活動が効果をあげるかもしれない。おそらく、その変換過程の中で、二つのメディアを比較して考える姿勢が育つのではないか。またそれは、ビジュアルリテラシーを育てるための基礎作業の一環ともなるはずである。

2. マンガを作文にする活動と大学生

2.1. 「ののちゃん第 8081 回」を文章化する

稿者の担当する日本体育大学の教職課程の中に「教育実習Ⅱ」という授業科目がある。教職課程の学生たちは小学校教員免許の取得を目指しており、四年生段階ではすでに小学校での教育実習を済ませている。そこで、この四年生たちと、「ののちゃん

第 8081 回」の小学校教材としての可能性を探ることにした。

今年度はコロナ禍の影響で、すべての授業がオンラインで行われている。したがって、次のような段取りを採用した。まず、授業予定の一週間前に、大学生たちがこのマンガをどのように理解しているのかを知るために、「マンガを見て作文を書く」という課題を出した。しかしいきなり、このマンガを作文文化するよという指示だけでは、学生に対して不親切だと思った。そこで、以下のような大学生向けの「手引き」(資料 1)を作成して提示した。「手引き」は、この授業科目の目的、すなわち小学生を対象にしてどのような教育指導を展開したらよいかを考えることを念頭に置いて書かれている。

資料 1 大学生向けの「手引き」

マンガを使って作文を書く授業について考えてみましょう。(府川担当)2020.6.11

子どもに活動(作業)をさせるときには、まず指導者が試みる。これは、鉄則です。事前にあれこれと想定することはもちろん大事ですが、自らやってみることで様々なことが見えてきます。それを「指導案」に組み込むことで、より良い学習計画に近づきます。そこで、今日はまず、マンガの続きを書くという活動をしてみます。

*

次に示すのは、朝日新聞に掲載されている「ののちゃん」というシリーズのマンガです。ののちゃんの家は五人家族で、かなり個性を持ったおばあさん、ゆかいなおかあさん、働き者のお父さん、それに中学生のお兄さんと、小学生のののちゃんが住んでいます。

今日は、おそらく休日なのでしょう。日曜大工が趣味のお父さんは、庭に出て、何かを作ろうとしています。実は、お父さんの日曜大工の腕前はかなりあやしい。せっかく椅子を作っても家族の誰もが怖がって座らないし、お父さん自身も「壊れるから触るな」というほどの出来映えです。

このマンガの話のストーリー展開は、それほど難しいものではないと思います。

なんとと言っても、最後のコマがポイントです。もし、この図版を拡大することが可能なら、最後のコマの左の上の隅あたりに「あー」というセリフが書き込まれていることに注意を向けて下さい。小さな字で書かれているので見えにくいかもしれませんが、おそらく家の中に

いる家族のどれかの声だと考えられます。(とりあえずここでは「家族の声」だということにしておきます。)

なお、最後のコマで、塀の外の通りにいる二人は近隣の子どもたちです。「明日天気になあれ」と唱えながら「お天気占い」をして遊んでいたのでしょうか。

＊

では、このマンガを作文にしましょう。「出だし」を指示した方が書きやすいと思いますので、最初の「出だし」を書いてみました。この後に続けて、作文を書きましよう。

作文の出だし:

ある日曜日のことです。ののちゃんのお父さんは、庭に出て日曜大工を始めました。木の箱を作ろうと思ったのでしよう。板の上のくぎを目がけて、力いっぱい金(かな)槌(づち)を振り上げ、「よし。」と、大きな声を出しました。……(この後を続けて書いてみましょう。)

作文の字数は、特に決めません。

皆さんが書いた作文を材料にして、来週は Zoom で、このマンガを「教材化」する目的と方策について考えます。

つまり、この文章と「ののちゃん第 8081 回」のマンガとを提示して、各自に作文を書いてもらい、次の時間ではその体験をベースにして、「図像表現と文章表現の差異」を小学生に教える意義とその方法について考えよう、という目論見である。

2.2. 「手引き」作成の意図

まず、この「手引き」に関して、作成の意図をいくつかを記しておく。

最初に「ののちゃん」の家族の紹介をした。先述したように「ののちゃんワールド」を熟知している読者と、ほとんど初めてこのマンガに出会うという読者とでは、内容理解の前提が大きく異なると思ったからだ。とりわけ、お父さんの日曜大工に関する情報は、このマンガの理解に役立つと考えた。

また、同様の理由で、塀の外の子どもたちは「ののちゃん一家」ではなく近隣の子どもであるということも書き添えた。この二人がののちゃんとお兄さんだと考える学生がいるかもしれないからだ。そう考えても一向構わないのだが、お父さんのストーリーと子どもたちのストーリーとが別の目的と論理と

で進行しており、それが「ガチャ」という物音によって初めて強固に関係づけられるという図式を明瞭にするためには、子どもたち二人は家族ではなく、外部の人間の方が好都合だからだ。もっともこれは「ののちゃん」に親しんでいる人にとっては、なくもがなの註釈だろう。さらにこの近隣の子どもたちが履物を使って「天気占い」をしていたことに関しても、そうした遊びを経験したことがないという場合があるかもしれないので、このことも「手引き」の中で触れておいた。

さらに、第四コマ目の左上の「あー」というセリフはきわめて小さく記されており、見逃しがちである。そこで、ここにも注意を向けるようにうながした。この「あー」が家の中にいる家族の声であることは確かだと思われるので、そのように解説しておいた。この「あー」という声とお父さんの「やれやれよかった。」というセリフと屋根の上の片方のサンダルとの三点が読者の頭の中でキチッと結び付けば、「ののちゃん第 8081 回」のマンガは容易に読み解けると思ったのである。そこで「手引き」の中には、「このマンガの話のストーリー展開は、それほど難しいものではないと思います。」などとよけいなことを書き込んでしまった。しかし後述するように、この第四コマ目の解釈は大学生にとってもかなり敷居が高かったようだ。

2.3. 「出だし」作成の意図

さらに「出だし」を設定して、その後に続く形式で作文を書かせたことに関する稿者の意図を述べておく。一言でいうと「助走路」を作った方が書きやすいだろう、ということになる。とあって、これは大学生の書きやすさだけを考えたわけではない。もしかすると多くの大学生には、自由に書かせた方が様々な種類と内容の作文が出てきた可能性がある。

それにも関わらず「出だし」を決めて、その続きを書くという活動を組んだのは、この授業における目的が「小学生への学習援助の仕方」を考えるところにあったからだ。つまり、この「出だし」は、小学生が作文を書く際の援助の工夫の一つを学ばせるための大学生向け教材という位置づけである。学生たちは、「出だし」に導かれて自らの作文を綴っていき、それが終わった後で、この「出だし」がどのような意図で書かれたのかを、次の時間になってから、稿者から伝えられるという手順になる。

この「出だし」の文章作成に関する稿者の意図は次のようである。

第一文と第二文は、「ある日曜日のことです。ののちゃんのお父さんは、庭に出て日曜大工を始めました。」とした。作文の冒頭で時と場所とを定め、「ののちゃんのお父さんは」と行動の主体がどのような動作をしたのかを、三人称全知視点の語り手が物語る敬体の文章を使った文体でスタートさせたのである。小学生の中には、第一コマ目を見て「お父さんがいる。トンカチを持っている。」のように、図像を一対一対応で説明するような文体で書き始める子どもがいるだろうと想定したからである。図を外側から説明することに終始すると、描かれているものだけを記述することに留まり、人物の内面やその行動の理由などを想像できなくなってしまう場合も多い。そこで、書き手を物語文体に誘導しようと考えたのだ。第一文・第二文の文体に乗ることができれば、その先もスムーズに展開できる可能性も大きくなる。

第三文は、「木の箱を作ろうと思ったのでしょう。」と語り手が人物の内面を推測するような内容を記述した。文章の語り手は登場人物の内面を推し量り、それを文章として外化することが可能だということを知らせるためである。

第四文の前半は、「板の上のくぎを目がけて、力いっぱい金槌を振り上げ」で、お父さんの動作の様子を外側から観察して描写する記述である。この作文は物語的な文体で書き進めていく予定なので、状況や情景の描写表現を適宜交えると生き生きとした文章になる。したがって、人物の様子を描写した記述をここに挿入した。

第四文の後半は、「「よし。」と、大きな声を出しました。」で、マンガの中の「吹き出し」を作文という形式の中にどのように書き入れるか、という見本のつもりである。吹き出しのセリフを「」（カギ括弧）でくくり、地の文につなげていくというおなじみの手法である。

いうまでもなく、ここでの作文の「出だし」は、その通りに書かせるための「手本」というよりも、書き手を物語文体に自然に導くための仕掛けとして設定したものだ。その中に、おそらくこのマンガの文章化が必要となると考えられる文章技法のいくつかをあらかじめ示しておいたつもりである。

2.4. 学生たちの作文

まず、稿者の解釈に比較的近い作文から紹介する。

資料2 学生の作文1

その時です。ふり下ろされた金づちから、すこっとぬけたような感じがしたのです。お父さんが金づちの先を確かめてみると、やはり、あるはずのものが抜けてしまっておりません。

「えっ。」と思ったその時、お父さんの後ろで『ガチャ』という音が聞こえたのです。

近所の2人でお天気占いをして遊んでいた子どものサンダルが、ののちゃんのお家の屋根に表向きに乗っかってしまったのでした。「あした晴れだ——。」と言いながら、子どもたちは、屋根に乗った表向きのサンダルを見えています。でも、どうやって屋根から取るのでしょうか。

それと同時に、ののちゃんのお家の中では、お兄ちゃんの「あー」という声。大切にしていた物がこわれてしまったのでしょうか。

そうとは知らず、のん気なお父さん。どうやら、屋根に乗ったサンダルの音を、かんちがいしているみたいです。「やれやれよかった。あとで回収しよう。」だって。

家に帰ってからお父さんはどうなるのでしょうか。

第四コマ目の理解は正確であり、「サンダルの音をかんちがい」という表現で、このマンガの「オチ」を説得的に説明している。また、お父さんのストーリーと子どもたちのストーリーが並行しているという問題を「それと同時に」「そうとは知らず」などという言語指標によって、明確に分別処理している。「図像表現と文章表現の差異」という点から見れば、ここがきわめて重要なポイントになる。

繰り返すことになるが、「図像」は一つの画面に同時並行的に複数のストーリーを収めることができる。しかし、複数のストーリーをいっぺんに理解しようとするなら、ただ混乱を来すばかりである。複数のストーリーが存在することを認識するには、まずは、その図像の中から単一のストーリーをある程度言語化して取り出す必要がある。そのためには、「始めと終わり」「原因と結果」などに着目して、物語として言語的に整序する。その上で、また別のストーリーをそこから取り出すことができれば、はじめて一つの図像に複数のストーリーが収録されて

いたことが分かる。

こうして図像の中から見出した複数の物語を、文章表現として正確に書き表す際には、「一方」や「ところで」あるいは「話は変わって」のような言語指標を使って、それらが相互に別個のストーリーであることを明示することになるだろう。この学生の場合には「それと同時に」や「そうとは知らず」などという言語指標によって、ストーリーの区別をしていた。しかしそうした作文は、半数にも満たなかった。

資料3 学生の作文2

カー杯金槌を振り下ろすと「すこ」と、空振りの音だけが聞こえました。よく見てみると、金槌の先端部分が無くなっています。その瞬間お父さんは「えっ!」と驚くと同時に、背後の自分の家の方から「ガチャ」と、何とも言えない嫌な音が聞こえてくるではありませんか。

そんな中、塀の外の通りにいる近隣の子どもたちが下駄を飛ばしてお天気占いをしていました。「明日天気になあれ」と足を思いっきり振ると、下駄はののちゃんが住むお家の屋根に上がってしまいました。「あした晴れだ」と、子どもたち。

そして眼鏡を掛けているお父さんですが、メガネを掛けていてもあまり見えないお父さんは、家の屋根に上がった子どもたちの下駄を金槌の先端部分だと勘違いし、「やれやれよかった。あとで回収しよう」と呑気なことを言っているのです。

しかし家の中からは「あー」と、聞こえてきます。実は、金槌の先端部分は、二階部分の窓から家の中に入ってしまった家具を破壊していたのです。

このあとお父さんはどうなるのでしょうか。ゆかいなおかあさんが鬼になっている姿が想像できます。

全体として、場面の転換もスムーズだし、一つ一つの出来事も的確にとらえている。「そんな中」という言語指標で、二つのストーリーを分け分けることもできている。また、文末には語り手が直接顔を出して「どうなるでしょう」と読み手に語りかけ、語り手の予想を提示して終わっている。こうした点は、よく書けている。

ただ「ガチャ」という音をお父さんさんの心理を代弁しているはずの語り手が、「何とも言えない嫌な音」と記述していることは気になる。この時点でのお父さんは、金槌の頭が屋根に上がったと判断して、安心してははずだ。これは、この文章を書

いている現実の筆者の心情と、作中の語り手の判断とを混同しているように思う。ただ、お父さんの視力にも言及しているところはユニークである。合理的な説明をしようと、視力の問題を持ち込んだのだろう。しかし「家の屋根に上がった子どもたちの下駄を金槌の先端部分だと勘違い」したという解釈はかなり苦しい。そう考えるとお父さんは地上にありながら、高い屋根の上の落下物を直接見ることができたことになってしまう。ろくろっ首ならともかく、（それはそれで楽しい展開になりそうだが）、お父さん自身はあくまでも地上視点しか持ち合わせていない。先述したように、マンガの読み手だけがドローンの視点で複数の事態を見ることができるのだ。

もっとも、この作文を例にして、「視点」という概念から「第四コマ目の解釈」の整合性を検討していけば、この授業の目的である「図像表現と文章表現」の問題に迫ることは可能である。その意味でこの作文は、図像表現の視点と文章表現の視点を検討するための格好の「教材」になり得る。

しかしこの例だけでなく、多くの学生が屋根の上にあるのは「金槌の頭」だと解釈していることも事実である。稿者にはどう見てもサンダルの方しか見えないが、これが「金槌の頭」だとすることで、どうにか話のつじつまを合わせようとしたのかもしれない。あるいは「ガチャ」という音から、お父さんの認識と同じように屋根の上にあるのは金槌の頭だと思ってしまったのかもしれない。さらに言うなら、オンラインによる小さなディスプレイを視聴しているせいで、図像の詳細を十分に視認できなかったのかもしれない。もし最後のケースだとすれば、学生には気の毒な提示の仕方だったことになる。

そうした例の一つを示そう。

資料4 学生の作文3

いざ釘を叩いてみると、釘が刺さりません。「あれ、おかしいな。」と思い金槌を見てみると、金槌の先端がありません。

「しまった!」と思ったと同時に、後ろで「ガチャ」と嫌な音がしました。慌てて振り返ると、先端は自宅の屋根の上に飛んで落ちていました。

「あぶなかった。」と冷や汗をかき、後で取りに行こうと思った。家の中ではそれを見ていた娘に「あー」とバレてしまいました。

外では、お天気占いをして遊んでいた子どもたちが、

金槌が上に向いたのを見て「明日は晴れだ」と馬鹿にされる始末。

「張り切りすぎるものじゃないな」と、ヒヤヒヤした日曜日のスタートでした。

お父さんと、「あー」という娘の声、それに近隣の子どもたちの三者が登場してはいるのだが、その三者の関係が明確につかめていないように見える。文章は各コマの様々な情報を摘記しているものの、全体のストーリーがつかめず、核になる部分の把握が曖昧だと言わざるを得ない。文章末の「結び」などには独自の工夫があって、うまく物語を収束させてはいるのだが、本人も十分にこの話の「オチ」に納得していない様子がかげえる。

実はこうした作文はかなりの数にのぼり、半数近くになった。したがって、作文を書かせた後におこなった稿者の授業は、「図像表現と文章表現の差異」を小学生に教える意義とその方法について考えるよりも、大学生の書いた作文を材料にしながら、あらためて「ののちゃん第 8081 回」の解釈を講義するような内容になってしまった。つまり、本稿の第 1 章に記述したような内容を、大学生に逐一説明する次第になってしまったのである。その結果一応このマンガの「オチ」については理解したようだった。しかし、その「オチ」が生じる理由を「図像表現と文章表現の差異」の問題に還元して説明しても、授業後に書かせた文章を見ると、はかばかしい学生の反応が得られたわけではなかった。

3. 別の学年の大学生の反応と小学生の作文

3.1. 別の学年の大学生への講義とその反応

後学期の授業もやはり同じくオンラインで授業を進めることになった。そこで、前学期で話題にした「ののちゃん第 8081 回」を、別の学年でも取り上げてリベンジしてみようと考えた。

今度は「初等国語科教育法」という授業名で、学部三年生が対象である。この授業科目は教員免許を取得するための必修科目であり、ほとんどの学生はすでに小学校現場における教育実習を経験している。授業の内容は、子どもの言語発達や国語教育の基盤について話をした後、「読むことの学習」に関する話題をいくつか連続して取り上げた。それに続く本時は、「図像を読む」というテーマのもとで、「ののちゃん第 8081 回」を教材として使い、2020 年

11 月 23 日(月)に Zoom の授業として実施した。

この時間の展開は、次のようである。最初に、別の回の「ののちゃん」の四コママンガを見せて、その「オチ」が「視点の移動」によって成立していることを確認する。(ここでは、その例は詳述しない。)

次に「ののちゃん第 8081 回」をめぐって、グループで、それぞれがどのようにこのマンガを理解したのかを話し合う時間を設定。その際、「オチ」の理解には、第四コマ目の「あー」に着目すること、屋根の上の物体が何なのかを考えることが大事であることを口頭で指示した。学生同士の話し合いの後、いくつかのグループから話し合いの内容を口頭で発表してもらった。すると、「オチ」がよく分からないままだったというグループと、的確に理解しているグループとがあった。自分一人ではこのマンガの「オチ」に気がつかなくとも、グループの中で誰か一人でもそれを説明することのできる学生がいれば、ほかの成員もすぐに共感して納得できたようだった。

その後、全体の講義に戻って、前学期の四年生たちに課した「手引き」を紹介して、そこで四年生が書いた作文のいくつかを提示してコメントを付した。もちろん、お父さんのストーリーと子どもたちのストーリーの交差とそれがドローンの視点によって可能だったことなどを含めて、このマンガの「オチ」に関する稿者の解釈を詳しく説明した。

授業の最後には、次のような質問に対する各自の考えを自由に記述してもらった。それは、「小学生にこの『ののちゃん第 8081 回』のマンガを授業することは可能でしょうか？ あなたはどう考えますか。また、府川の示した指導の方法以外に、何かよい『手立て』を思いついたら書いてください。」というものである。

このような問いかけに対して、様々な解答が学生から寄せられた。教育実習を済ませたばかりの学生が多いためか、「可能」「不可能」というだけでなく、このような「手立てを」採用すれば可能なのではないかという具体的な指導のアイデアもたくさん示された。たとえば、マンガの各コマをバラバラにして組み立てさせる、一コマずつ提示して第四コマ目を想像させる、吹き出しの文字を消してセリフを考えさせる、さざえさん・コボちゃんなどほかの四コママンガと比較する、文章(作文)を先に示してからどんなマンガの図像なのかを考えさせる、グ

ループで劇にする、などである。それとは別に、「ののちゃん第 8081 回」は「オチ」が難解なので、もっと分かりやすい四コママンガを使うべきだという意見も多く見られた。

また、「不可能」と応答した学生は、「先生から説明されても私は最後までよく分からなかったので（小学生には）無理」とか、「自分でさえ理解することが難しいので、小学生はもっと分からないだろう」のような理由をあげていた。確かに、教材について十分に理解できたという確信がなければ、それを題材として子どもたちに「教える」ことを躊躇する気持ちが生まれるのは、ある意味で自然である。そうした姿勢は、きわめて謙虚だと評価することもできる。

しかし「大学生の私にさえ理解できないのだから、小学生には理解できるはずがない」という思考方法に陥っているのだとすれば、それはそれで問題がある。このことに関しては、「小学生の方が想像力豊かで、柔軟性があると思う」「子どもは面白い発想をして、大人の想像を遙かに超えることもある」という学生もいる。稿者もこれまでにそうした実例を山ほど見てきたし、実感としてもその通りだと思う。

とするなら、やはりこの「ののちゃん第 8081 回」を実際の小学生に読ませたらどんな反応が生じるのかを知りたくなってくる。またその情報をこの大学三年生の学生に環流することで、「子どもの発想」についてあらためて考え直すこともできるのではないか。こう考えて現職の先生にこのマンガを作文にする作業を依頼できないかと思っていたところ、ある小学校の先生から協力してくださる旨の返事をいただいたので、さっそく御願ひすることにした。

3.2. 小学四年生の作文

東京都公立小学校の四年生の児童は、どのような作文を書いたのか。本節は、それを紹介して稿者のコメントを加えてみたい。

まずこの作業をしてもらうために、前学期に大学四年生に作文を書いてもらったときに使用した「手引き」（第 2 章参照）を、小学生用に書き直した。たとえば「回収」という語彙に注をつけたり、未学習の教育漢字はひらがなに変えたりしたが、基本的な内容に大きな変更はない。児童たちにはこの手引きを読んでから「ののちゃん第 8081 回」のマンガを見て作文を書いてもらうことにした。

「出だし」に関しても、大学生に示したものとほぼ同じであるが、これも小学生の親近語彙を考慮して、「日曜大工」を「工作」にしたり、「金槌」を「トンカチ」に変えたりした。以下には、「「よし。」と大きな声を出しました」に続いて書いた児童の作文をいくつか示す。

資料 5 児童の作文 1

だが、つぎにお父さんがトンカチを振ろうとしたときに、「すこっ」と音がなり、トンカチを見るとトンカチの先っぽが、とれていました。お父さんがビックリしていると、「ガチャ」と音がなり、お父さんはトンカチの先っぽが、やねにのっているとかんちがいてしまいました。そしてお父さんが「やれやれよかった。あとで回収しよう。」といいました。だが、ほんとうは子どもたちがくつをなげたのであった。そしてトンカチの先っぽは、かぞくにあたっているのであった。

その後、子どもたちはくつをお父さんからかえしてもらって、お父さんはののちゃんからトンカチの先っぽをかえされました。（ほんとうはののちゃんにあたって、ののちゃんはなきながらかえしてきた。お父さんは「ごめんごめん」といったが、ゆるしてくれなくて、ののちゃんにおもちゃをかってあげました。）

この児童は、お父さんのストーリーと子どもたちのストーリーが交錯していることや、金槌の音と履物の音を誤認したことなど、第四コマ目の「オチ」を構成する基本的なことがらを押さえている。このクラスでは、第四コマ目の関係を把握し、それを文章表現としてある程度の整合性を持って表出することができたのは、半数に近い。大学生の実態を見たときは、小学生がこのマンガの「オチ」を理解した上で、それを文章表現することはかなりハードルが高いだろうと思っていたが、一コマ一コマを丁寧に見ていきさえすれば、小学生にとってもそれほど難しくなかった。

もっとも、文章表現という点からこの作文を観察すると、いかにも小学校中学年らしい特徴が見える。それは、一文の文字数が多くて話しことば的な雰囲気が残っていること、敬体と常体とが入り交ること、などである。また、最初は指定した「出だし」の文体に乗っているものの、徐々に自分の文体に移行していく様相も見て取ることができる。

興味深いのは、後日譚の内容である。この児童の

場合は、子どもたちとお父さんの二つのストーリーが、それぞれ「モノ」の返却によって完結させられている。近隣の子どもたちは、お父さんから履物を返してもらおう。おそらく作文の書き手は、屋根に乗ってしまった履物がこれからどうなるのか気になったのだろう。そこでお父さんが返却するというストーリーを創作した。実はこのクラスの児童たちの多くは、何らかの形で屋根の上の履物の回収に言及している。四年生にとっては、お父さんの失敗譚より、履物を失った子どもの側に共感したのかもしれない。あるいは、第四コマ目に屋根の上の履物がアップで描かれているので、それが強く印象に残ったのかもしれない。

一方、お父さんはののちゃんから金槌の頭を返してもらおう。書き手の児童は、それだけでは説明不足と考えたのか、背後に隠れているエピソードを丸括弧でくくって付した。このエピソードによって、金槌の頭が命中した「かぞく」は、ののちゃん本人であったことがはっきりする。おもちゃを買ってもらったことで父親の謝罪を受け入れるという結末は、いかにも子どもらしい発想である。

資料6 児童の作文2

しかし、トンカチのかたいところを見てみると、かたいところがないではありませんか。なんとかたいところが、とんでいるではありませんか！

とつぜん「ガチャ」という音が屋根の方からきこえてきました。

お父さんは近所の子どものサンダルをトンカチのかたいところとかんちがいをして、そのサンダルを回収しようとしています。そして、家の中で「あー」という悲鳴が聞こえてきました。

そのばん夜ご飯の時、父は「屋根の上にはサンダルしかなかったけど、トンカチのかたいところはいったい…」とその時、母が「そういえば昼ごろに何かかたい物が飛んできたんだけど、見ればトンカチのかたい部分だったんだけど、これってもしかしたらパパ？」と聞いてきました。すると「すみません。私のだと思えます。」母が「次から気をつけるように」父が「はい。すみません。次から気をつけます。」といい、家族が笑いにつつまれました。

金槌の頭をどのように言語化したらいいいのかが分からないので「トンカチのかたいところ」という表

現を採用している。もっとも稿者が先ほどから使っている「金槌の頭」という表現も勝手に使用しているので、五十歩百歩である。ここでは読み手に意味が伝わればいい。そのことは大きな問題ではない。

この児童は、「近所の子どものサンダルをトンカチのかたいところとかんちがいをして、そのサンダルを回収しようとしています。」と書いており、お父さんが「勘違い」をしたことは理解している。しかし、この表現だと、その内実がかなり曖昧に思えてしまう。というのは、この時点でお父さんが「回収しよう」と考えていたのは、あくまでも「金槌の頭」だったからだ。それが実際には「サンダル」であることを知っているのは、天気占いをしていた子どもたちと、このマンガの読者だけである。

もっともこの作文を書いた児童が、このマンガに即して以上のような十分な理解をしていたとしても、それを正確に文章表現できるかどうかは、また別の問題になる。つまりまだ小学四年生は、その場に存在しない文章の読み手に向かって、厳密な文章を構築するという文章作成学習の経験に乏しいからである。したがって、この文章表現だけを見たかぎりでは、まだ「曖昧」な点が残るといった評価になってしまうのは仕方がないかもしれない。

それにしても「あー」という悲鳴に関わる後日譚は、きわめて巧みでほんのりと温かささえ感じられる。おそらくこの児童の文章表現の個性は、こうした部分に発揮されているのだろう。

3.3. 児童による文章表現と図像表現

以上のように、小学生の子どもたちが厳密な文章表現の力を駆使して作文を書くことに慣れていないとするなら、別の手段で表現したいという児童が現れてきても不思議ではない。担任の先生によると、数人の児童から、このマンガの「第五コマ目」を書いてもいいかという発言があったそうだ。文章ではうまく表現できないので、図像による表現欲求が生まれたのだろう。

たとえば、次のような例である。

資料7 児童の作文3

トンカチをふり下げたその時!なんとトンカチの先っぽが消えていたのです。「えっ!」とお父さん。するとお父さんのはい後から「ガチャ」という音が。よく見てみると、となりの家にトンカチの先っぽが。ほっとするお父さ

ん「やれやれよかった。あとで回収しよう。」
 ちょうどそのころ近所の子もたち二人がお天気占
 いをしていました。が、高く上げすぎてしまいサンダル
 はののちゃんの家の屋根へ。ですが子どもたちはサン
 ダルを見て「あした晴れだ。」とのんきに言って見てい
 ました。



図1 児童の作文3における図像表現

この児童の考えによれば、お父さんは飛んでいった金槌の頭のゆくえを、「ガチャ」という音を聞いた途端に視認したことになる。その時お父さんが、「よかった」と言う発言をした理由は、たぶん次のようなことではないだろうか。すなわち、金槌の頭は見えなくなったが行方不明にはならなかった、音がした方向に行って探せば再入手することができるだろう、と考えたのではないか。金属塊が何かにぶつかって事故を起こす危険性より、それを失うことを心配したのだという思考である。いかにも子どもらしい発想のようにも思える。これがこの児童による、お父さんのストーリーの解釈である。

一方、近隣の子もたちのストーリーに関して、屋根の上にサンダルを投げ上げたことがきちんと記述されている。しかし、二つのストーリーが「ガチャ」という音によって結びつけられていることと、またそれが「お父さんの勘違い」によるものだという発想ではない。その点から考えるなら、このマンガの「オチ」は理解されていないのだろう。

さらにまた、この児童は「あー」という発声を、ののちゃんの家族の声ではなく、隣の家の人の声だ

と受けとめている。自ら描いた第五コマ目の図像は、そうした解釈にもとづくものだ。「おまけ(つづき)」と題された図には、謝罪しているお父さんが握り手しかない金槌を持ち、激怒している隣家の人は金槌の金属部分を持っている。お父さんの吹き出しには「ごめんなさい」、隣家の人の吹き出しには「あんたねえー」に加えて怒りのマークが挿入されており、足元にはガラスの破片が散らばっている。この図は「あー」という声から想像したストーリーを的確に図像化したものだといえよう。この児童にとっては、文章で表現をするよりも図像表現の方が使い勝手のよいツールだったのかもしれない。

3.4. 児童作文4における文章表現と図像表現

最後に、やはり同じように第五コマ目を描いた別の児童の例を見てみたい。この児童は、第五コマ目に該当するストーリーを想像して文章記述を書き、それに加えて、同内容の図像を添えている。つまり、同じ物語内容を、一方では文章で表現を行い、一方では図像で表現を行ったことになる。これは、本稿の叙述全体にとっても、きわめて興味深い分析対象である。そこで、この児童の作文と図像とを少し詳しく検討してみたい。

資料8 児童の作文4

そしてくぎをたたいたかと思うと、ハンマーの先がスッポリぬけて、ののちゃんのお父さんは思わず「えっ!」と
 いてしまいました。ふりかえってみますと、やねの上で
 「ガチャ」となりました。

ののちゃんのお父さんは、ほっとして「やれやれ」とい
 って、あとで回収することになりました。

ですが、さいごのコマでやねの上には、スリッパがの
 っています。そして、右に「あした晴れだ」といっていま
 す。そして、左に「あー」と書いてあります。家にハンマ
 ーの先っぽが入ってしまったのでしょうか。

そして、はしごをのぼってやねの上にきますと、なんと
 サンダルがめのまえにあったのです。そして少し時間
 がたつと「バリーン」ときこえました。とっさにおりて、い
 えのまえにいくと、いえのまどがわれてしまっています。

この児童は、第三コマ目までどうにか「出だし」の物語文体に乗って、マンガのストーリーを記述している。しかし、第四コマ目では、物語を語る文体ではなく、「ですが、さいごのコマで」のように児

童自身が図像を外側から説明するような文体に転換してしまった。おそらくこの児童は、ここまでどうにか使用してきた物語文体では、第四コマ目から読みとった情報を文章化して処理することができなくなったのだろう。（大学生の多くも同様である。）それにもかかわらず、金槌の先端だと思込んでいるお父さんの認識と、屋根の上にあるのは履物だと知っている近隣の子どもたちと読者の認識との間のズレに関しては、十分に把握できている。

そのことは、「ですが」という逆接の接続語（助動詞+助詞）を使用していることから推察できる。この逆接表現は、二つのストーリーの背反した状況をこの児童が把握していることを示す言語指標である。さらにこの児童は、「家にハンマーの先っぽが入ってしまった」ので、「あー」という声が聞こえたのだ、という原因と結果の関係も了解している。とって、このままでは整合的な文章表現になっていると評価することはできない。先の児童と同じように、この児童も厳密な文章を構築する文章作成学習の経験に乏しい、ということになるのかもしれない。

だが、この児童が後日譚として書いた第五コマ目の文章と図像はきわめて興味深い。まず、再掲にはなるが、文章の方から確認する。これは「資料8 児童の作文4」のうちから、第五コマ目に関する部分だけを抜き出したものである。

資料9 後日譚となる第五コマ目の文章表現

そして、はしごをのぼってやねの上にありますと、なんとサンダルがめのまえにあったのです。そして少し時間がたつと「バリーン」ときこえました。とっさにおりて、いえのまえにいくと、いえのまどがわれてしまっています。

記述されている内容は、以下のようなことだろう。すなわち、お父さんははしごにのぼって屋根の上を確認した。すると、地上視点では見えなかったサンダルを発見する。それまでお父さんは、屋根の上に金槌の頭があると確信していたにもかかわらず、その認識が覆されたのである。その驚愕が「なんと目の前に」という修飾節によって強調表現されている。さらにその後「少し時間がたつと」窓ガラスの割れた音が聞こえてきたので、お父さんは急いではしごから下り、そのガラス窓の前に駆けつけるという展開になる。「割れてしまっている」と「しまう」と

いう補助動詞の使用が、ガラスの破碎が完了していることを示している。この時お父さんは、自分の過ちで粉々になったガラスを目の前にして、いかんともしがたい状態に陥っていたのだ。

だがよく考えると、この児童の記述した内容には、時間的順序関係という点で不自然なところがある。それを指摘すると、もしお父さんの手もとから飛び去った金槌の頭が窓ガラスを割ったとするなら、その時刻はお父さんが「ガチャ」というサンダルの音を聞いたのとほぼ同時刻だったのではないかと、という疑問である。お父さんが「あとで回収しよう」とつぶやいた時点で、もう金属のかたまりはガラスを破損していたのではないかと。この児童が考えたように、お父さんがはしごを用意して屋根の上のサンダルを確認し、それから「少し時間がたつ」ってから、窓ガラスが割れたのだとすれば、金槌の頭は相当の時間空中で停止していたか、かなり遠回りして遊覧飛行をしていたことになる。

もっともそれは稿者が、児童の書いた作文を事後的・分析的に眺めている立場だから言えることかもしれない。当事者の書き手にとっては、自分の連想にしたがってこの作文を書いただけであって、記述中に際してなんら齟齬を感じなかった可能性もある。実際、創作したこの第五コマ目の作文についても、はしごにのぼったことを叙述した第一文と、窓ガラスの破損を発見したことを叙述した第二文とを入れ替えさえすれば、時間の前後という矛盾は消え去ってしまう。

ではなぜこうした文章記述になったのか。おそらくそれはこの児童の文章表現の仕方にも原因があると考えられる。見て取れるように、この作文には「そして」という接続詞が五ヶ所に使われている。「そして」は前文と後文とを連結するきわめて調法な接続詞で、小学校中学年位までの作文に頻出する。その基本的な機能は、前文に新たな情報や認識を付加することである。

作文の書き手は、一つの文（判断）に「そして」を使って次の文（判断）を加え、さらにまた「そして」を使ってその次の文（判断）を加えるという作業を繰り返して、文章を産出する。つまりこの作文は、その時々描き手の連想を次々と付加していくことで成り立っている。「そして」という接続詞は、その時々働く連想や思いつきを「添加」していく言語指標として機能していたのだ。そのようにして

完成した文章であるから、全体の一貫性や統一性を考慮するよりも、芋づる式にずるずると書かれたように見えるのは、ある意味で当然かもしれない。とりわけ、この第五コマ目の記述で二箇所に出てくる「そして」は、ほとんど接続詞としての職能を果たしておらず、削除しても内容的にはまったく問題はない。

文章表現にも増して面白いのは、この児童の描いた五コマ目の図像である。

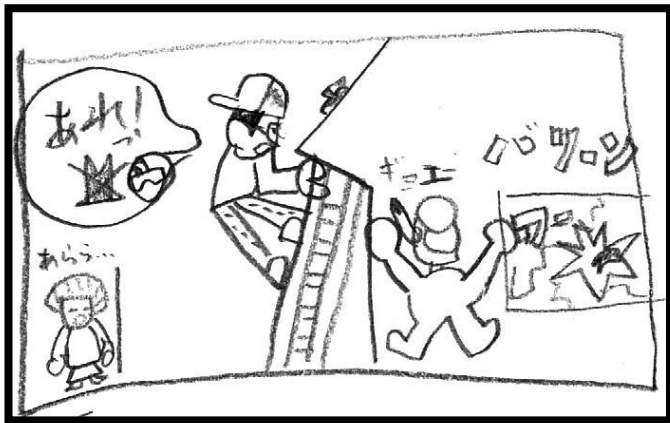


図2 後日譚となる第五コマ目の図像表現

はしごをかけて、屋根の上を見ているお父さんの吹き出しの中には、多くの情報が含まれている。ここには「あれ!」という音声に加えて、金槌の金属部分に×が、サンダルに○がつけられている。この図は、屋根の上にあるのが金槌の先端だと「勘違い」していたお父さんが、はしごをかけて屋根の上を確認したら、それは想定とは異なり片方だけのサンダルだった、という一連の行動と認識活動とを的確に図像化したものにほかならない。文章による表現では、同じ内容を伝えるのに相当の文章量を費やさなくてはならないが、この図像表現では一目でお父さんの驚きとその理由とが伝わってくる。この後、このサンダルを天気占いをしていた子どもたちに返すことができれば、近隣の子どもたちのストーリーは完結することになる。

ところが、この児童の描いた同じ図の中には、もう一つのストーリーも描き込まれている。それは第四コマ目の左上に記されていた「あー」という声から生まれる物語である。

ここにもまた、同じお父さんの姿が登場している。このように一画面の中に同一時間帯に起きた出来事

だけではなく、異なる時間の出来事を描き込む描画法は「異時同図法」と呼ばれる。東西の古い宗教画や日本の絵巻物、あるいは幼児画などに頻出する描法でもある。知られているように、こうした画法は、近代的リアリズムによる遠近法が一般的な描画法として普及する以前には、ごく普通に見ることのできた作画法である。

さらに、その他の幼児画の描法も想起される。たとえば、幼児画には、自分が目に見えるもの、あるいは自分が見たいものを描く「レントゲン画法」と呼ばれる描法がある。まるでレントゲンで透視するように、地面の中の物体や、壁を無視して家屋の内部を描いたりするので、そう呼称されている。一般的な説明としては、幼児は自分の知っていることをすべて一枚の絵の中に表現しようとするためこのような絵になるとされている。

また、幼時画では多視点図法という描法もよく見られる。これは一枚の絵の中に、上から見たり右から見たり、多くの視点から見た物体を書き込む描画法である。これらの描法を使用した幼児画は、心理学言説において「発達」や「成長」という文脈の中に組み込まれて理解されてきた。つまり、人間の幼児期に特有の発達段階に見られる表現方法であり、それがだんだんと大人の描画法へと「発達」していくと説明されてきたのである。²⁾

こうした知見を文章表現方法に敷衍してみると、この児童が第四コマ目を文章化した作文表現は、次のように説明できるかもしれない。すなわちこの児童は「そして、右に『あした晴れだ』と書いています。そして、左に『あー』と書いてあります。」と記述していた。物語の中心人物であるお父さんの視点に寄り添っていたそれまでの語り口から、マンガの第四コマ目の画面を外から観察するような語り口へと移行している。これを、図像における「異時同図法」と同様の発想で、見たものをすべて取り込もうとして書かれた文章だと考えることもできるのではないか。

もちろん「ののちゃん」の第四コマ目は「異時同図」描法ではなく、近代リアリズムによる「同時同図」の遠近法に依拠して描かれている。しかし、この児童はそれを混乱してとらえているのである。いや「混乱」というべきではないかもしれない。おそらく、異時同図的な把握の発想がこの児童の内側に潜んでおり、それが文章表現にも絵画表現にも表れ

ていると考えるべきなのだ。³⁾

先ほど稿者は次のように述べた。すなわち、「はしごにのぼったことを叙述した第一文と、窓ガラスの破損を発見したことを叙述した第二文とを入れ替えさえすれば、時間の前後という矛盾は消え去ってしまう」と。このことも、この児童が「異時同図」的な発想を持っているとするなら、同様な説明が可能なのではないか。因果関係や時間の前後関係にとらわれずに、とにかく思いついたことや目にしたことを書き付けたのだろう。

さらには、第五コマ目の作文における「そして」の接続詞の機能がきわめて希薄である理由も、そこに求めることもできるのかもしれない。

4. おわりに

児童の書いた文章表現を理解するには、図像表現を支えている視点や時間把握の問題を組み込むことも必要なのだ。そのことによって、文章表現の統一性と整合性という観点からだけでなく、内面の総合的な心理運動という視点からも、児童の作文を考えることができるようになるのではないか。それは、大人や大学生が書いた文章においても、重要な文章表現評価の視点になるかもしれない。

「ののちゃん第 8081 回」のマンガを文章化する作業を通して、以上のようなことを考えた。ささやかな「実践報告」である。

註

- 1) 『ののちゃん』は、いしいひさいちの 4 コマ漫画。『朝日新聞』朝刊の 4 コマ漫画作品として、1991 年 10 月 10 日から『となりのやまだ君』の題で連載が開始された。主人公であるのぼるくんよりも妹のののちゃんの人気が高かったため、1997 年に題と主人公が変更された。いしいの病気療養にともない、2009 年 11 月 22 日から 2010 年 2 月 28 日まで休載していた。2020 年 1 月には連載 8000 回に達した。『となりのやまだ君』を通算すると 30 年近くに及び、朝日新聞史上で最長のマンガ連載となっている。
- 2) 山形恭子『初期描画発達における表象活動の研究』2000 年 11 月
山形恭子『表記活動と表記知識の初期発達』風間書房 2013 年 10 月
- 3) 瀬戸賢一『時間の言語学—メタファーから読み

とく』ちくま新書 2017 年 3 月
松浦荘『時間とはなんだろう—最新物理学で探る「時」の正体』講談社ブルーバックス 2017 年 9 月 など

付記

- ・本研究は「人を対象とした研究倫理審査（日本体育大学）」の承認を受けた。（承認番号：020-H113）
- ・「ののちゃん第 8081 回」の出典は、朝日新聞 2020 年 4 月 9 日朝刊である。朝日新聞からは、承諾番号 20-4364 で本稿掲載への承諾をいただいた。
- ・著作権者いしいひさいち氏からは、該当作品の近くに「いしいひさいち」を記す条件のもとに、本稿掲載への許諾をいただいた。

文献

- 瀬戸賢一(2017)『時間の言語学—メタファーから読みとく』筑摩書房
松浦荘(2017)『時間とはなんだろう—最新物理学で探る「時」の正体』講談社
山形恭子(2000)『初期描画発達における表象活動の研究』風間書房
山形恭子(2013)『表記活動と表記知識の初期発達』風間書房

(ふかわげんいちろう)

(2020 年 12 月 23 日投稿、2021 年 1 月 11 日受理)